

〔文学篇〕

【論文】

19世紀におけるドイツ語呼称代名詞の用法について

—ゲオルク・ビューヒナーの戯曲『ヴォイツェク』を手がかりにして—

萩野 蔵平

Über den Gebrauch der deutschen Anredepronomen im 19. Jahrhundert — anhand von Georg Büchners Drama „Woyzeck“ dargestellt —

Kurahei OGINO

要旨

Als Anredepronomen bezeichnet man hier pronominale Anredeformen zweiter Person wie *du/ihr* oder *Sie*. Für die Anredepronomen des Deutschen sind einmal eine reiche Variation und zum anderen deren ständiger Wechsel im Laufe der Zeit charakteristisch. Der vorliegende Beitrag soll versuchen, den Gebrauch der deutschen Anredepronomen in der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts anhand von Georg Büchners Drama „Woyzeck“ zu beschreiben. Meine Untersuchung hat erstens erbracht, dass das Inventar der Anredepronomen in diesem Werk aus einem viergliedrigen System von *du/ihr*, *Sie*, *Ihr*, *Er/Sie* besteht, zweitens dass der Gebrauch insbesondere von zwei zwischenmenschlichen Faktoren wie „Sozialrang“ und „Solidarität“ gesteuert wird und schließlich dass das Pronomen *Er/Sie*, das im 17. Jahrhundert noch zur Höflichkeitsform höchsten Grades gedient hatte, im Verlaufe der Zeit, wie aus dieser Untersuchung auch ersichtlich, rasch zu Pejorativa degradiert wurde.

キーワード：ドイツ語呼称代名詞、ゲオルク・ビューヒナー、『ヴォイツェク』、ポライトネス、歴史語用論

1. 問題設定

ドイツ語の *du* – *Sie*、英語の *you*、フランス語の *tu* – *vous* のような会話の相手呼び指す 2 人称代名詞を「呼称代名詞」(Anredepronomen) と呼ぶ。ドイツ語の呼称代名詞には、親称 *du* と敬称 *Sie* の区別が知られており、これは多くのヨーロッパ諸語とも共通するものだが¹、他のヨーロッパ諸語には見られないドイツ語に顕著な特徴としては、その形式の多様性のみならず、それら形式間での頻繁な入れ替えがある。例えば Simon (2003:93) によると、18世紀から19世紀初頭にかけてのドイツ語には、伝統的な親称 *du/ihr* のほかに、敬称として、当時の階級社会を反映して *Sie* (「彼ら」からの転用)、*Ihr* (親称複数 *ihr* からの転用)、*Er/Sie* (「彼・彼女」からの転用)、*dieselben*² が認められ、それらの間には発話相手との「上下関係・力関係」あるいは「仲間意識」の有無に応じた細かな使い分けの原則があったとされる。

例えば、本論文において分析の対象として取り上げる G. ビューヒナー (Georg Büchner) 作『ヴォ

『ヴォイツェク』(Woyzeck)の台詞の中にもその典型的な例が見てとれる。その冒頭部分で主人公の兵士ヴォイツェクは、上官の大尉に対して常に敬称のSieで呼びかけるが、一方大尉はヴォイツェクには、(1)に見られるように、目下・身分の低い者に対する呼称詞であるErを用いている。

- (1) Hauptmann. „Woyzeck, Er ist ein guter Mensch, ein guter Mensch – aber Woyzeck, Er hat keine Moral!“

「ヴォイツェク、貴様は善良な人間だ。だがな、ヴォイツェク、貴様には道徳心というものがない！」

19世紀後半に書かれたこの戯曲で呼称詞Er/Sieは、上の例に見るように、差別的な意味合いで用いられているが、17世紀にはまだ本来の最も丁寧な敬称詞として用いられていたことが知られており、数世紀の間にEr/Sieの価値が急激に低下したことがわかる。

本稿の目的は、このように変化の激しいドイツ語呼称代名詞の変遷の一端を『ヴォイツェク』におけるその用法を通して分析し、その用法に関する先行研究を検証することにある。

本論に入る前に、ここで呼称詞研究に文学作品を用いることの問題点について少し触れておこう。呼称詞に関する歴史的研究は、「歴史語用論」(historische Pragmatik)³の一部をなす。ところで語用論は、現代語の口語表現を主な分析データとして理論を構築してきた学問分野であるが、それに対して歴史語用論が扱うことのできる資料は古い時代に書かれたデータに限定される。そのため、それらの資料からその当時の話しことばを再構しなければならないわけだが、その問題に対して歴史語用論は、書記データの中から、話しことばが書き記されている、ないしは話しことばがかなりの程度反映されていると想定できるテキストジャンルを選び出し、それを分析するという方法をとっている。そのような「話しことばに近い」テキストジャンルには、「手記」、「手紙」、「裁判記録」、「説教」のほか、「戯曲」の台詞などが含まれる。創作された文学作品の言語使用が、実際の話しことばをどの程度反映しているかについては、しばしば議論の的となるところだが、データ分析に十分な注意を払えば、『ヴォイツェク』のような戯曲からも価値あるデータが得られるとの前提に立ち、以下の論を進めたい。

2. 作品について

まず最初に、分析対象となる本作品についてその概要を確認しておく。ビューヒナー(1813-1837)の『ヴォイツェク』は、周知の通り、未完の草稿断片として残されたため、テキストをめぐる複雑な問題が存在するとされるが⁴、本稿では、Fritz Bergemann (Insel-Verlag, 4. Auflage 1949)に依拠するレクラム版を使用する：Georg Büchner : Woyzeck. Leonce und Lena. Herausgegeben und mit einem Nachwort versehen von Otto C. A. zur Nedden. Reclam Nr. 7733, 1987. なおこの戯曲の刊行は、作者の死後の1879年、初演は1895年である。

『ヴォイツェク』は、階級社会を背景として、それに起因する悪意に満ちた差別によって破滅させられていく社会の最底辺の人々を描く不条理劇である。ここでこの戯曲のあらすじを簡単に紹介しておく。主人公のヴォイツェクは、上官の大尉からからかいの対象とされる兵卒である。軍務の傍ら、

僅かな生活費の足しにと医学研究の実験台となるという屈辱的な仕事もしている。ところで、彼には内縁の妻マリーがいて、彼女との間に一人の男子をもうけているが、彼女は鼓手長の誘惑に負けてヴォイツェクを裏切る。精神の混乱から生じる幻視と幻聴に導かれて、ヴォイツェクはマリーを沼に連れだし、ナイフで刺殺した後、自らも入水する。

ところで、これはビューヒナー研究者には既に周知のことであるが、この戯曲は、そもそも実話を素材にしていた。それは、クリスティアーン・ヴォイツェク (Christian Woyzeck) という名の理髪師・かつら職人が、愛人関係にあった未亡人クリスティアーネ・ヴォースト (Christiane Woost) を嫉妬にかられて殺害し、その罪で処刑されるという事件である。死刑は、1824年8月27日にライプツィヒで執行され、公開処刑を見ようと町の広場には多くの市民が集まったという。ビューヒナーは、この事件を『国家医事雑誌』(Zeitschrift für Staatsarzneikunde, 1824/1826) で知り、この戯曲の執筆を着想したのであった。

呼称代名詞の分析に入る前に、ここでこの戯曲の主要登場人物をまとめておく。

フランツ・ヴォイツェク (Franz Woyzeck)：主人公。兵卒。内縁の妻を彼女の裏切りにより刺殺し、自らも入水自殺する。

マリー (Marie)：ヴォイツェクの内縁の妻。鼓手長との不貞のため、やがてヴォイツェクによって刺殺される。

大尉 (Hauptmann)：中隊長。ヴォイツェクの上官。ヴォイツェクに髭をそらせて彼をからかう。

医師 (Doktor)：人体実験のためにヴォイツェクを雇っている医師。彼にインゲン豆だけを食べさせる人体実験を行ない、人間の動物への退化を研究している。

鼓手長 (Tambourmajor)：マリーの浮気相手。なおTambourmajorは、直訳すると「鼓笛隊少佐」だが、実際は下士官待遇であった。

アンドレス (Andres)：兵卒。ヴォイツェクの兵隊仲間。作中ではヴォイツェクをいじめの対象にしない唯一の人物。

マルグレート (Margret)：マリーの隣人。

居酒屋のあるじ (Wirt)。

ケーテ (Käthe)：居酒屋の女。

ユダヤ人の古道具屋 (Trödler)：ヴォイツェクにマリー刺殺に使うナイフを売る。

見世物小屋の客引き (Marktschreier)。

見世物小屋の親方 (Budenbesitzer)。

3. 本作品における呼称代名詞の種類とその用法について

呼称代名詞の用法は、まず「対称的」か「非対称的」かの二通りに分類できる。前者は、話し手と聞き手の間で同一の呼称代名詞が双方向的に用いられるのに対し、後者では互いに異なる代名詞が用いられる。例えば現代ドイツ語の2人称は、大人の間では、「対称的な」使用が原則である。つまり、duにはduで、SieにはSieで答えるというやり方である。それに対して、(肉親以外の)大人と子供の間では、大人から子供へはduが、一方子供から大人へはSieが用いられ、ここでは「非対称的な」呼

称が見られる。これはまた、封建社会や階級社会に典型的に見られる現象でもある。

さて本論文で取り上げるのは、du/ihr, Ihr, Sie, Er/Sieの4種類で、「対称的呼称」、「非対称的呼称」の順で分析を行う。なお、以下において単独のSieは、3人称複数から転用された敬称のSie（あなた・あなたがた）を、Er/Sieは、3人称単数から転用された（卑称の）呼称詞を指すこととする。また各事例の用例数には、構文上は主語の表れない命令文もカウントされている⁵。用例の出現総数とその内訳は以下の通りである。

	対称的用法	非対称的用法	不明なもの
du	64	41	19
Sie	22		
Er/Sie	1		
小計	87		
総数	147		

【表1 呼称詞の出現総数とその内訳】

3.1 対称的呼称

3.1.1 ヴォイツェク⇄マリー：du（38例）

二人は愛人関係にあるため、両者はduで呼びかける。

- (2) Woyzeck. „Du hast ein' roten Mund, Marie.“
 「お前の唇はなんて真っ赤なんだ、マリー。」
- (3) Marie. „Franz, du redst im Fieber.“
 「熱にうなされているのね、フランツ。」

3.1.2 ヴォイツェク⇄アンドレース：du（13例）

この二人は兵隊仲間なので、「戦友のdu」を用いている。

- (4) Woyzeck. „Still, hörst du's, Andres, hörst du's?“
 「静かに、聞こえるか、アンドレース、聞こえるか？」
- (5) Andres. „Woyzeck, hörst du's noch?“
 「ヴォイツェク、まだ聞こえるのか？」

3.1.3 鼓手長⇄マリー：du（5例）

鼓手長とマリーは親密な間柄なので、ここでもduが用いられる。

- (6) Tambourmajor. „Und du bist auch ein Weibsbild.“
 「お前は実にいい女だ。」

- (7) Marie. (*ihm ansehend, mit Ausdruck*) „Geh einmal vor dich hin!“
 (彼をじっとみつめ、感極まって)「ちょっと前に進んでみてよ！」

3.1.4 ヴォイツェク⇔ケーテ：du（8例）

なじみ客と居酒屋の女の関係なので、duを用いる。

- (8) Woyzeck. „Kannst du nicht singen?“
 「唄ってくれないか？」
- (9) Käthe. „Aber was hast du an deiner Hand?“
 「手についているのは何？」

3.1.5 大尉⇔医師：Sie（14例）

両者は、ヴォイツェクとは異なり、上層階級に属するため互いにSieを用いる。

- (10) Doktor. „Ich stehle meine Zeit nicht, wie Sie, Wertester.“
 「わしは時間を無駄にせんよ、貴殿みたいにはな。」
- (11) Hauptmann. „Herr Doktor, erschrecken Sie mich nicht!“
 「先生、脅かさんでくださいよ！」

なおSieは、医者と学生との間でも用いられている（7例）。

- (12) Doktor. „Fühlen Sie, meine Herren, fühlen Sie!“ (*Sie betasten ihm Schläfe, Puls und Busen.*)
 「触ってみなさい、諸君、触ってみなさい！」（彼らは彼 [=ヴォイツェク] のこめかみ、脈、胸を触る。）

3.1.6 マリー⇔マルグレート：Er/Sie（1例）

- (13) Marie. „Trag Sie Ihre Auge zum Jud, und laß Sie sie putze; vielleicht glänze sie noch, daß man sie für zwei Knöpf verkaufe könnt.“

「あんたのめん玉をユダヤ人のところへでももっていったらどうだい。そしたらそれを磨いてくれてさ、一組のボタンとして売ってくれるかもしれないよ。」

Margret. „Was, Sie? Sie? Frau Jungfer! Ich bin eine honette Person, aber Sie, Sie guckt sieben Paar lederne Hose durch!“

「何だって、あんたがそう言うのかい？未婚の子連れ女が！あたしゃ、ちゃんと結婚している女だよ。でもあんたなんか、皮のズボン7枚を重ねても中が透けて見えるというじゃないか。」

Marie. „Luder! [...]“

「この売女！ [...]」

この二人は隣人同士なので、ふだんはduで呼び合ってもおかしくない関係にあると想像できるが、作中において一回だけ現れる上記の二人の会話場面では、duではなくEr/Sieが用いられている。このEr/Sieは、ここでは陰悪で軽蔑的な場面で用いられていることからわかるように、卑称詞として使われている。しかし、この代名詞は、元来17世紀に始まった2人称的に用いられたder Herr、das Fräulein、die Jungfrauなどを受ける人称代名詞er/sieが独立的に使われるようになったものであって、当初は最も丁寧な敬称詞として用いられていた。

(14) *herr sohn*, lasz er es immer gut sein.

「息子殿よ、常にこれでよしとする気持ちをお忘れにならぬように」(ehe eines weibes, 1735 [出典：J. Grimm/W. Grimm (1854-1960), 3. Bd., 689])

3人称を2人称に転用することは、(14)に見るように「丁寧さ」を生み出す効果があるが、多用されると反対にその効果が薄れ、やがて急激な意味悪化を蒙ることがある。呼称詞Er/Sieはその典型的な例で、『ヴォイツェク』が書かれた19世紀後半には卑称詞となっていることが見てとれる。なおその変化のメカニズムについては、「4. ドイツ語呼称代名詞の変遷」で取り上げる。

3.2 非対称的呼称

3.2.1 ヴォイツェク⇔大尉：Sie (5例)、Er/Sie (21例)、du (5例)

ヴォイツェクと大尉は、その軍隊での階級差を反映して、前者は後者に敬称Sie (5例)で、後者は前者にEr/Sie (21例)で呼びかけている。

(15) Woyzeck. „Ja, Herr Hauptmann, die Tugend, ich hab’s noch nit so aus. Sehn Sie, wir gemeine Leut, das hat keine Tugend.“

「その通りであります、大尉殿。その道徳が足らんのであります。ご存知の通り、我々下々の者には道徳がないのであります。」

(16) Hauptmann. „Was sagt Er da? Was ist das für eine kuriose Antwort? Er macht mich ganz konfuz mit seiner Antwort.“

「何だと。何というおかしな返答だ。貴様の返答を聞くと頭が混乱してくる。」

このように大尉はヴォイツェクに対しては卑称詞Er/Sieを用いているが、Er/Sieではなく、duが用いられている文例が5例ある。

(17) Hauptmann. „Gut. Woyzeck. Du bist ein guter Mensch, ein guter Mensch. Aber du denkst zuviel, das zehrt; du siehst immer so verhetzt aus.“

「よろしい。ヴォイツェク。お前は善人だ。だがお前は考えすぎる。それが体を蝕むのだ。お前はいつもせかせかしておる。」

このEr/Sieからduへの切り替えの理由は、文脈からはっきり読みとることはできないが、この例は、「親密さのdu」や「戦友のdu」というよりも、Er/Sie程ではないにしろ、やはり「軽蔑のdu」と考えるべきであろう。

3.2.2 ヴォイツェク⇔医師：Sie（4例）、Er/Sie（30例）、du（5例）

ヴォイツェクと大尉との関係は、ヴォイツェクと医師の関係にも当てはまる。ヴォイツェクは医師を敬称Sie（4例）で、一方医師はヴォイツェクをEr/Sie（30例）で呼びかける。

(18) Woyzeck. „Herr Doktor, haben Sie schon was von der doppelten Natur gesehn?“

「先生、先生は二重になった自然を見たことがありますか？」

(19) Doktor. „Woyzeck, Er kriegt Zulage!“

「ヴォイツェク、お前の手当てを増やしてやろう。」

この場合にも、呼称のEr/Sieからduへの移行が5例見られる。ここもやはり、ヴォイツェクと大尉との関係と同様、「軽蔑のdu」とみなすことができる。

(20) Doktor. „Bestie, soll ich dir die Ohren bewegen?“

「このけだものめ、俺にお前の耳を動かさせるつもりか？」

3.3 duからEr/Sieへの移行（ヴォイツェク⇔マリー：1例）

反対にdu→Er/Sieの例が1例見られた。ヴォイツェクとマリーは、(2)(3)で指摘したように、通常duを用いている仲だが、下の例は、彼女の浮気を疑い、疑心暗鬼に駆られたヴォイツェクが彼女を罵る場面である。激昂した感情がduからEr/Sieへの引き金となったと想像できる。だがその後、彼はまたduに戻り、全体としてdu→Sie（卑称詞）→duという順番になっている。

(21) Woyzeck. „Weib! — Nein, es müßte was an dir sein! [...] Sie geht wie die Unschuld! Nun, Unschuld, du hast ein Zeichen an dir.“

「このあま。何かおかしいぞ。[...] こいつ罪のないような顔していやがる。罪がないだと、お前にはなにか印がついているはずだ。」

3.4 その他の用例（19例）

以下に対称的か非対称的か、用例不足のためはっきりと判断できないケースを挙げておく。

3.4.1 Ihr（5例）

ユダヤ人の古道具屋と居酒屋のあるじは、客のヴォイツェクに敬称Ihrを用いている。なおこのIhr

は、親称複数*ihr*が2人称単数敬称に転用されたものである。一方、ヴォイツェクが二人のあるじに呼びかける場面はでてこない⁶。

(22) Jude. „Wollt Ihr Euch den Hals mit abschneiden?“

「旦那はそれでご自身の首をかき切るおつもりですかい？」

(23) Wirt. „Was, mit der rechten Hand an den rechten Ellenbogen? Ihr seid geschickt.“

「何ですって、右手で右の肘へですかい？あなたは器用な方でいらっしゃる。」

3.4.2 *ihr* (5例)

ヴォイツェクは、(あるじを含む)居酒屋に居合わせた客たちに親称*ihr*を用いている。

(24) Woyzeck. „Teufel, was wollt ihr? Was geht's euch an?“

「こんちくしょう、何をいいやがる。お前たちの知ったことか？」

3.4.3 *Sie* (9例)

見世物小屋の客引き (Marktschreier) とその親方 (Budenbesitzer) は、客に対し敬称*Sie*を用いている。

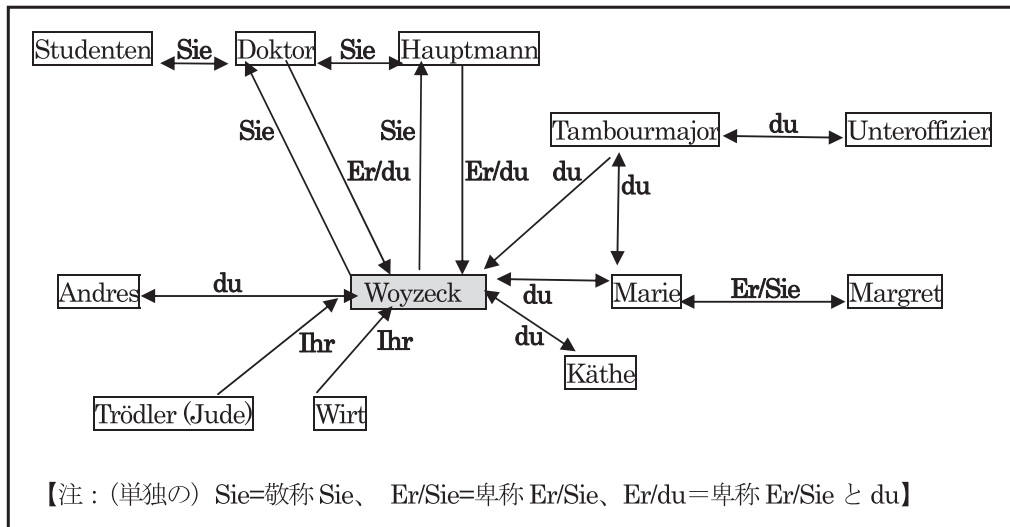
(25) Marktschreier. „Meine Herren, meine Herren! Sehn Sie jetzt die Kreatur, wie sie Gott gemacht: nix, gar nix.“

「みなさん、神が創ったこの創造物をご覧あれ。これは何の、まったく何の価値もない代物であります。」

(26) Budenbesitzer. „Sehn Sie, das Vieh ist noch Natur, unideale Naur!“

「ご覧ください、畜生は自然ではあるが、理想なき自然であります。」

以上の関係を相関図に表すと次のようになる。



【表2 『ヴォイツェク』の呼称詞相関図】

『ヴォイツェク』に見られる呼称詞使用は、次の4点にまとめることができる。

- 1) 身分・力関係で上位の者は、下位の者にdu（「軽蔑のdu」）を用い、下位の者は上位の者にSieを用いる。
- 2) 双方が同位の場合には、親しい間柄ではdu（「親しみのdu」）を用いる。また礼儀正しく距離を置く場合にはIhrを、さらに最高位の敬称としてSieを用いる。
- 3) du/ihrの下には、蔑称としてEr/Sieがある。
- 4) 呼称詞は「仲間意識」(Solidarität)と「上下関係・力関係」(Sozialrang)という二種類の要因が複雑に絡み合ったシステムを成す。特に後者は「礼儀のパロメーター」と密接に関連し、それは次のような、右に行くほど丁重さが減じる階層を形成する：Sie>Ihr>du>Er/Sie⁷。

4. ドイツ語呼称代名詞の変遷

ドイツ語呼称代名詞の特徴として、著しい変遷が見られることはすでに述べてきたが、ここではその経緯を手短かにまとめ、『ヴォイツェク』に見られる呼称詞使用の歴史的な位置づけを確認しておく。ドイツ語呼称詞の変遷についてはSimon (2003:93)が参考になる。

敬 称				dieselben	dieselben	
				Sie	Sie	
			er/sie	er/sie	Ihr	
		Ihr	Ihr	Ihr	er/sie	Sie
親 称	du	du	du	du	du	du
時 代	ゲルマン語	古高ドイツ語 ～初期新高 ドイツ語	17世紀	18世紀	19世紀初頭	現代ドイツ語

【表3 ドイツ語呼称代名詞の変遷 (Simon (2003) に準拠)】

まずゲルマン語において2人称代名詞は、親称duのみであったと推定される。その後時代ごとにそれに新しい呼称(敬称)が加わるが、そのメカニズムは1)「複数化」(一人の相手を複数人称代名詞で呼びかけること)と、2)「3人称の2人称への転用」の二つである。

第一の「複数化」には、a) 古高ドイツ語における、親称複数ihrが単数敬称に転用されて「親称du ⇔ 敬称ihr (Ihr)」という二項体系が成立したこと(②、③を参照)、b) 18世紀で、「あなた」を表すのに、「彼ら」を表す3人称複数sieが転用されSieができた例がある(⑩、⑪、⑫などを参照)。なお後者には、2)の現象、すなわち「3人称の2人称への転用」が同時に起こっている。一人の相手を複数人称代名詞で呼びかけることは、一方で、「多数は力なり」のメタファーが働き、相手を「力ある者」として見立てる効果があり、これが「敬意」を伝える言語手段となる。他方でまた、一人の相手に対し「多くの者の一人」と間接的に表現することは、直接指示に伴う非礼を回避することになるので、これによっても相手に対する敬意を表現することが可能となる。いずれにせよ、「複数化」には何らかの敬意を表現できる効果がある。

またより身分の高い人物を複数ihrで呼びかけるというこのような慣習は、ローマ帝国の東西分裂(395年)により同時に複数の皇帝が存在することになり、ローマ皇帝がラテン語で自らをnos(我々)と複数で自称し、それに呼応する意味で相手からも複数のvos(あなた方)で呼び返される習いが、ドイツ語にも導入された結果であるという(Paul (1968:122) 参照)。

次に第二の「3人称の2人称への転用」の例には、a) 17世紀において、ihr (Ihr)に加えて、名詞的呼称語を受ける3人称代名詞er/sieが敬称として導入されたこと(⑬、⑯、⑰を参照、ただしこれらの例では卑称詞にまで変化している)のほか、b) 18世紀になって同じく3人称の複数sieが大文字書きされ、敬称の人称代名詞Sieとして自立したことがある(⑩、⑪、⑫などを参照)。名詞的呼称語とは、3.1.6で見たように、2人称的に用いられたder Herr、das Fräulein、die Jungfrauなどのことをいい、a)ではそれを受ける人称代名詞er/sieが独立的に使われるようになって生まれたものである。またb)は、「閣下」「陛下」などを意味するEure Majestät(en)/Gnaden/Weisheitのような称号が、前世紀同様、18世紀になるとそれら(いくつかは複数形)を受けるsieが大文字書きされ、敬称の人称代名詞Sieとして自立していったことによる。それにはまた、ラテン語の複数形excellētia

(閣下)といった対応する表現形式が存在したこともその後押しをしたと想像される。

「3人称の2人称への転用」は、つまり2人称を3人称で呼びかけることは、相手が「今ここにいないかのように」表現することを可能にし、話し手が聞き手の領域を直接侵す危険性を最小限に抑える働きがあるため、対称詞を3人称で言いかえることは、相手の領域を侵さない最良の表現方法、つまり最も効果的な敬意表現となる⁸。

このような戦略が典型的に表われるのが、Eure Majestät(en)/Gnaden/Weisheitのような呼称表現である。身分の高い人物を直接指示を避けて間接的に呼ぶこと、つまり「避称」は、君主の不可侵性が最もよく保証される常套手段である。

以上のことから、2人称単数を「3人称かつ複数」で表示する人称代名詞Sieは、1)と2)の両方の戦略を同時に実現しており、相手に対する配慮を二重に含んでいるといえる。

ちなみにこの二つの戦略は、ブラウン&レヴィンソン (Brown/Levinson 1987) の「ポライトネス理論」によっても説明できる。それによると、「ポライトネス」(politeness)とは、人間関係を円滑するための言語戦略であり、「他者から認められたい」という欲求に基づく「ポジティブ・ポライトネス」(positive politeness)と、「他者に邪魔されたくない」「自分の領域を侵されたくない」という欲求に基づく「ネガティブ・ポライトネス」(negative politeness)に分類される。この分類に従えば、1)「複数化」に見られる相手を「力ある者」として褒め称えるタイプの敬意は「ポジティブ・ポライトネス」の、そして「多くの者の一人」という捉え方は、直接性を回避し、相手の領分を侵さない配慮がなされているという意味で、反対に「ネガティブ・ポライトネス」の一例とみなすことができる。

また2)「3人称の2人称への転用」は、「ネガティブ・ポライトネス」に分類できる。なぜならば、2人称を3人称で呼びかけることは、上に述べたように、相手が「今ここにいないかのように」表現することを可能にするため、話し手が聞き手の領域を直接侵す危険性を最小限にするメリットを生み出すからである。つまり、2人称を「3人称かつ複数」で表示する人称代名詞Sieは、「ポジティブ・ポライトネス」と「ネガティブ・ポライトネス」の両方を同時に実現しており、相手に対する配慮を二重に含んでいるという点で、最も効果的な敬意表現と言えるだろう⁹。

5. まとめ

上に挙げた表3においてSimonは、19世紀初期の呼称詞の体系をSie-Ihr-er/sieが敬称、duが親称としているが、19世紀後半の『ヴォイツェク』についての今回の調査では、敬称にSie-Ihrがあることは同じだが、er/sieが敬称から卑称へ価値が急激に低下していることが確認できた。実際Simonの分析からも、er/sieが17世紀、18世紀、19世紀初期と時代とともに、その相対的な位置を下げていることが読みとれる。したがって、データ分析をさらに拡大していきそのことが全般的に実証されれば、表3の19世紀初頭の欄は、19世紀を前半と後半を分け、後者ではer/sieの順位をduと入れ替え、さらにer/sieを卑称として別に表記する必要があるだろう。

呼称詞がこのような急激な変化に見舞われるのは、この品詞が使用頻度が極めて高いため、使い古されて敬意を十分にできないと感じられるや否や、また別の形式があらたに導入されるためである。それと同時に、それまで使われてきた形式は急激な意味の悪化を引き起こす。Ihrからer/sieを経てSie

への敬称の変化もそのような理由によるものである。自分の伝達意図、つまり呼称詞の場合は相手に対する「敬意」を最大限に実現したいとする欲求こそが、呼称詞の入れ替えを引き起こす最大の要因である。

注

- 1 さらにいくつか例を挙げれば（親称—敬称の順）、オランダ語：jij—u（<Uwe Edelheid「貴下の高貴さ」）、スペイン語：tú—usted（<vuestra merced「貴下の恵み」）、チェコ語：ty—vyなどがある。また英語にも17世紀頃まではthou—youの区別があったが、現代英語ではyouに統一された歴史がある。
- 2 Simon（2003:115）は、*dieselben*について次のような用例を挙げている：Glück zu, *Monsieur*, ich erfreue mich, dass ich die Ehre habe, *dieselben* zum andermale zu sehen（Christian Weise 1688, Drama; zitiert in Metcalf 1938:84）「どうぞご幸運を。あなた様にまたお目にかかれる名誉に浴することを楽しみにしております。」なお*dieselben*はもっぱら文語に用いられた。
- 3 「歴史語用論」（historische Pragmatik）は、1990年代半ばに始まった比較的新しい研究領域で、歴史言語学と語用論の融合を志向する。この用語自体は、Jucker（1995）以来定着したものである。語用論は、言語（記号）の使われ方、ならびに言語（記号）と言語（記号）使用者との関係を研究する分野なので、歴史語用論とは、1）各時代における言語使用の有り方（＝語用論的フィロロジー）および2）その歴史的变化（＝通時的語用論）、そして3）言語使用の変化と言語変化の関係を研究する分野と定義される。つまり本稿は主として1）に係わるものである。
- 4 これについては『ヴォイツェク ダントンの死 レンツ』（ビューヒナー作、岩淵達治訳、岩波文庫、岩波書店 2006年）の286-296に詳しい解説がある。
- 5 命令文の中には、定動詞と主語との文法的な一致が欠如している例がある：„Red Er doch was, Woyzeck! Was ist heut für Wetter?“ 「（大尉が）おい何とか言え、ヴォイツェク。今日の天気はどうなんだ?」。この用例で、動詞Redはduに対する命令形を表すが、Erが挿入されている。このような事例は、分類上Er/Sieの例に含めて分類した。なお(13)のMarieの台詞も参照のこと。また類似の用例として、Nübling（2008:161）は、Haben die Dame gut gespeist? 「奥様はおいしく召し上がっていただけましたでしょうか?」を挙げている。ここでは定動詞habenは文法上はSieと一致するはずだが、呼称詞としてはdie Dameが用いられている。
- 6 ユダヤ人に対する呼びかけは、中世以来、常に「軽蔑のdu」である。岡村（1994:428）参照。
- 7 ちなみにGottsched（1762:280）は、当時（18世紀）の敬語使用について、次のような例を挙げて、左ほど丁寧な呼びかけとなると説明している：*Dieselben* bitten mich. *Sie* bitten mich. *Er* bittet mich. *Ihr* bittet mich. *Du* bittest mich. つまりErは、18世紀においてはまだ敬称となっていたことがわかる。
- 8 3人称を2人称に転用するケースは、日本語にも数多く認められる：「あなた（彼方）」「きみ（君）」「貴殿」「貴様」など。なお日本語の「貴様」には、敬称が卑称に引き下げられるというドイツ語のEr/Sieと類似の変化が起きている。
- 9 滝浦真人（2005）、第II章参照。

使用テキストおよび翻訳

- Georg Büchner : Woyzeck. Leonce und Lena. Herausgegeben und mit einem Nachwort versehen von Otto C. A. zur Nedden. Reclam Nr. 7733, 1987.
- 『ゲオルク・ビューヒナー全集 全1巻』手塚富雄・千田是也・岩淵達治監修。河出書房新社1970年。
- 『ヴォイツェク ダントンの死 レンツ』ビューヒナー作、岩淵達治訳、岩波文庫、岩波書店2006年。
- 『ゲオルク・ビューヒナー全集 I』日本ゲオルク・ビューヒナー協会有志訳、鳥影社2011年。

参考文献

- Besch, Werner (2003): Anredeformen des Deutschen im geschichtlichen Wandel. In: Werner Besch/Anne Betten/Oskar Reichmann/Stefan Sonderegger (Hrsg.): Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung. Berlin/New York: Walter Gruyter, 3. Teilband, 2599-2628.
- Brown, Penelope /Levinson, Stephen C. (1987): Politeness. Some universals in language usage. Cambridge University Press. (ペネロピ・ブラウン&ステイーヴン・レヴィンソン：『ポライトネス。言語使用における、ある普遍現象』田中典子（監訳）、研究社、2011年。)
- Brown, R./Gilman A. (1960): The pronounces of power and solidarity. In: Thomas A. Sebeok (ed.): Style in Language. Cambridge, MA: MIT Presss, 253-276.
- Gottsched, Johann Christoph (1762): Vollständigere und Neuerläuterte Deutsche Sprachkunst. Leipzig (Reprint: Hildesheim/New York: Georg Olms 1970).
- Grimm, Jakob (1898): Deutsche Grammatik. Bd. 4.1. Gütersloh: C. Bertelsmann. [Nachdruck: Georg Olms, Hildesheim 1989].
- Grimm, Jakob/Wilhelm Grimm (1854-1960): Deutsches Wörterbuch. 33 Bde., Hirzel Verlag Leipzig.
- Jucker, Andreas H. (1995): Historical Pragmatics. Pragmatic Developments in the History of English. Amsterdam: John Benjamins.
- Nübling, Damaris, et al. (2008): Historische Sprachwissenschaft des Deutschen. Eine Einführung in die Prinzipien des Sprachwandels. Gunter Narr Tübingen.
- Paul, Hermann (1968): Deutsche Grammatik III, Max Niemeyer Verlag Tübingen.
- Simon, Horst J. (2003): Für eine grammatische Kategorie >Respekt< im Deutschen. Synchronie, Diachronie und Typologie der deutschen Anredepronomen. Max Niemeyer Verlag Tübingen.
- 岡村三郎 (1994) : 「ドイツ語の呼称代名詞 (Anredepronomen) —今日のドイツ語を中心に—」。千石 喬・川島淳夫・新田春夫 (編集) 『ドイツ語学研究 2』。クロノス、421-443。
- 高田博行 (2011) : 「敬称の筈に踊らされる熊たち—18世紀のドイツ語呼称代名詞」。高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編著) 『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する』。大修館書店、143-162。
- 滝浦真人 (2005) : 『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討』。大修館書店。